

私の比較思想学会と創立期の事務局風景

渡 辺 明 照

原稿依頼を受けた翌朝、幼少の頃の夢を見ました。おとつとそんな昔まで戻ることはない、と、思わず苦笑しました。というのも昔の記録は、自坊の大改修のため、整理されたか、奥の方に埋もれているか、とにかく半世紀もの前の資料は何もなく、ただ思い出だけが頼りの心もたないお話になりそうで、困惑したからです。

私事で恐縮ですが、比較思想との関わりとえば、事務局を預かる大正大学の西洋哲学研究室と、学会の創設に奔走し、後に学会の会長となられる峰島旭雄先生を措いては語ることはできません。早稲田大学教授でいらつしやつた峰島先生ですが、大正大学の我が研究室への思い入れは尋常のことではなかったかと思えます。増上寺でも筆頭格の由緒ある廣度院のご住職でもある峰島先生であるからして、仏教の牙城である大正大学であえて西洋哲学を学ぼうとする私どもに期待をかけてくださったのかもしれません。とにかく授業だけでなく我々が希望する勉強ができるサブゼ

ミを次々と数々開いてくださり、そこで若き研究者たちは薫陶を受けました。なかでも特筆すべきは原典主義で、そのためのさまざまな語学を勉強して原書に触れ、原典を使って哲学することを教えられました。もちろん仏教関係のテキストもそこには入っていません。比較思想の精神が叩き込まれたのはたしかにこの場所でした。仏教を基調とする大正大学の学的傾向のなかで西洋哲学を学ぶということは、こういうことなのだ、と、妙に納得したものです。将来、寺を担うことになるだろう自分としては居心地がよく、毎日が楽しく充実したものでした。

その後、私自身は哲学の学会だけでなく仏教の学会にも参加するようになったのですが、ある時、仏教学の偉い先生から、どちらかに決めなければ大成しない、と苦言を受け、ショックを受けました。思えばあの頃、対比的研究ということで、生半可な知識で大上段からモノ言うそれこそ生意気な学生だったのでしょうか。一事を深く研究すべきことは分かっていたのですが、文献の由緒

ばかりを追い求め、仏教の思想そのものを我が身に引き寄せて身を以て思索するという心意が感じられなかったのです。己れの「生意気さ」は、峰島先生の「原典主義」で窘められましたが、それ以来、仏教の学界では哲学用語を使わず、哲学の学界では仏教用語を振り回さない、という要領だけは身に着けたものです。でもいつもどこかしと不消化を感じていました。そういう状況の時に、比較思想学会が立ち上がりました。願ってもないことです。学会の発表では、東西の思想が真正面から衝突するさまを目撃し、世界のさまざまな思想が一つの場で比較検討されるのです。思想比較の先覚者はいっぱいいるでしょうが、比較思想という領域が学会として形になっていくことに感動を覚えました。しかも学会事務局が大正大学の西洋哲学研究室が担うことになりました。こんな誇らしいことはありません。比較思想に関わる先生方の会話にも、傍から見て紅潮した雰囲気があったように感じ取れました。あの時、大袈裟ではありますが、比較思想、これが私の生きる道と、思ったものです。

思い起こせば比較思想の機微に触れたのは、般若教学の大家、梶芳光運博士の大学院講義でした。講義は、M・ヴァレーザによる竜樹「中論」解釈のドイツ語テキストを使って読み進められました。あの頃の私どもにはちんぷんかんぷん。しかし難解な仏教用語がドイツ語に訳され、それをまた日本語にすると平易な言葉に置き換えられ、不思議と身近なものになる小気味よい感覚を覚えました。大正大学に西洋哲学の研究室があることにこんな意義があるものだというを確認した瞬間でした。思えば当時

の研究室主任教授の白木淑夫先生は時宗、講師であった峰島旭雄先生や田丸徳善先生（後に会長）は浄土宗、中川栄照先生は真言宗、あの梶芳先生も真言宗、私はと言えば天台宗、と、研究室は仏教諸宗の坩堝でした。研究室との交流をもつ仏教関係の先生方も何人もいました。もちろんセクト色や専門の独白色はありましたが、さまざまな会合で和気藹々と話し合いをされる先生方を見て頼もしく思え、また、固陋な宗派意識は哲学によってのみ乗り越えられるものであるということを確認したものです。このようなでの比較思想学会創立とその事務局を研究室が担うという話でした。

学会発足当時、研究室は助手、副手制度であり、私は、現在理事である宮野升宏助手のもとで副手でありました。副手は先生の仕事の補助や学生の研究の面倒をみるような役目でしたが、当然、当研究室への事務局設置は大学院生やOBとともに大いに盛り上がり、ころある仏教学関係の大学院生も交えて盛んに議論がなされたのです。峰島先生のサブゼミのなかで、行き詰まるような哲学的問題が起ると、先生はその道の専門の先生を講師に招いてくれたりしました。また、研究室所属の大学院生が少数で議論が深まらないもどかしさを覚えたとき、先生にその悩みを訴えると、インターカレッジな研究会を提案され、他大学の大学院生との交流もできました。それが現在も続いているインターユニ哲学研究会で、年一回の研究会開催でいまや四十八回にもなっています。さらに、先生が持っていた増上寺の三康文化研究所の研究室、早稲田大学の研究室をはじめ、先生のご自宅まで開放して、

ゼミを開いてくださったのです。そこには他大学の学生、それに先生方まで参加され、お付き合いが格段に広まりました。現比較思想学会会長の頼住光子先生もそのなかの一人です。またその当時、峰島先生のお世話による新年会が、増上寺の奥にある古式ゆかしい御殿の大広間で毎年開かれ、回を重ねるごとに人数が増え、学生だけでなく偉い先生も招かれて、学生にとっても直接、ご教示いただける幸せな会合でした。十数年は続いたと思います。が、学界で活躍される先生方のすぐそばで緊張しながらお話を伺ったり、激励されたり、それはそれは懐かしいことばかりです。峰島先生は学会発足、その後の学会の発展に大きな力を持っていたとは聞いていましたが、このようなことが実質上、学会の発展と継続の素地になっていたのだと思います。

比較思想学会の研究大会は、最初の何年かは大正大学で行われた覚えがありますが、学会開催日が近づくとき西洋哲学研究室はてんやわんやの大忙しでした。峰島先生はいつも開催プランのメモ書きのコピーを大量に抱え、開催日までの準備や開催当日のプランを事細かに説明され、私どもはそれに従って役割分担や作業手順を話合ったものです。そんななかで一番たいへんだったのは当時、助手であった宮野先生だったでしょう。会議にも出席し、準備の取り纏めはすべて宮野助手の肩にかかっていたのです。傍から見てそれは気の毒に思えるくらいでした。準備の遂行には人員の確保がなにより大切です。ところが呼びかけると皆たいへん協力的で、OBやら学部在学生まで集まってくれるのです。もちろん無償です。ゼミでお世話になっているのですから、そのお返

しとばかり、懸命に仕事をこなしていくのです。すべては手作業。門衛に門限を遅らせてもらってまで仕事は継続するのです。夕飯は、近くの出勤から取り寄せるカツ丼。これがまたおいしく、何回、何日、同じものをいただいても不思議と飽きることがなかったのです。

大会前前日、前日ともなれば、現場当たり、役割分担、書類整理、詰め込み作業、動線のシミュレーション、諸会議のお世話など、数々の作業がありました。私が任されたのは主に書きもの類。案内掲示用の立て看板や演題や会場案内掲示、ことに会場の大規模看板は苦勞をしました。下手な字で恥ずかしい思いを何度もしましたが、お世辞であつても仲間が「素晴らしい」と言ってくれるので、なんとか勤めを果たしました。なによりたいへんなのは理事会が終わってからでないといふ決算予算書が出てきませんから、会議の終わるまで待つてそれから書き方に取り掛かるのです。大きな模造紙を広げて書くのですが、一文字も間違えることはできません。学会直前の準備はこのような過酷なものでしたが、不思議と疲れは感じませんでした。峰島先生はいつも最後まで私たちの作業を見守っておられました。先生を見送った後は、必ずと言っていいほど赤ちようちんか喫茶店に立ち寄り、また激論を繰り返すのです。最終電車は常のことでした。

学会当日の事務局裏方の役目は、学会がスムーズに滞りなく進行することだけです。お手伝いの者たちの働きぶりは入念に練られたプラン通り完璧に遂行し、帰り際には他大学の先生方からも褒められ、たいへん嬉しく思ったものです。会員対応の事務的な

作業の中心となり、当日は受付事務を担っていた、今は亡き日下部哲夫君、遠藤海蔵君、寺田ひろ子君などの手際のよいそのない仕事ぶりは今でも目に焼き付いていて消えることはありません。思い出すと言えば、同じく若くして亡くなられたデュイ学会の事務局の鶴間規文先生、浮田雄一先生の力添えも忘れられません。故人となられた先生に限りませんが、大正大学では藤本正久先生、中田勉先生、仏教学の北條賢三先生は準備の段階からちよくちよくお顔を出され励ましの声をかけてくれました。

最初の頃の学会の内容で目立つのは、比較思想の方法論、時間論や自然観などを主題とする洋の東西の比較論、近代日本における西洋思想の受容、発掘や再評価。どれもわくわくするようなシンポジウム、講演、個人研究発表でした。なかでもご長老の松尾宝作先生の比較思想方法論への熱気、中村元先生の比較思想の未来に夢を持たせるお話は印象深いものでした。学会開催と並行して峰島先生主催で、学会設立への強力な推進者のお一人であった松尾先生を囲んでの宿泊勉強会、また、仏教の専門家などをお招きして温泉宿でひざ詰めで行われた宿泊勉強会も何回かありました。それぞれ時間をたっぷりとって心行くまで議論を重ねる真に重厚な研究会でした。現在も年に数回行われている例会の原形になるものだと思います。研究大会は、その後、東京と地方と隔年で開催されるようになりましたが、地方大会は、その地のゆかりの偉人を取り上げたり、その地の施設をお借りし、地域の参加者も加わり、それぞれにユニークな大会となっていました。私どもも、見聞を広げるとともに、懐かしい思い出もたくさんいただいた

ものでした。

（わたなべ・みょうしょう、西洋近代哲学・比較哲学、
元大正大学講師・最勝寺住職）